

小松重男

の  
み  
蚤とり侍



新潮社

小松重男

の  
み  
蚤とり侍

新潮社

蛋のみとり侍ざむらい

昭和六十二年四月二十日 印刷  
昭和六十二年四月二十五日 発行

定価／一〇五〇円

著者／小松重男こまつしげお

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六・五一二  
編集部(03)二六六・五四二

郵便番号 一六二

振替 東京四・八〇八

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／株式会社大進堂

乱丁・葺丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Shigeo Komatsu 1987 Printed in Japan

ISBN4-10-349602-9 C0093

目次

蚤とり侍 5

唐傘一本 37

一世一代 87

鯉の縁側 127

代金百枚 163

年季奉公 213

装  
幀  
·  
村  
上  
  
豊

蚤とり侍



蚤  
と  
り  
侍



江戸時代の天明期に、『猫の蚤とり』という生業なりわがあつたことは意外と知られていない。  
『猫の蚤とり』は、またの名を『密夫屋みそかあや』とも言ひ、実態は、なんと女性客目当ての淫売夫であつた。

へ猫の蚤、とりましよう〜

と、白昼のどかな売り声をあげて江戸の町々を流し、各階層の女達に房事を切り売りしてゐたのである。発生した時点ではたしかに看板通りの乞食商売で、飼猫の蚤をとらせて貰つては駄賃を稼ぐ、なんともしがたない生業しやうはいだったが、猫好きの妾や後家に呼ばれて住居すまいへ出入りしているうち、遂には淫みだらな遊び相手もつとめて、正當な《蚤とり仕事》のそれとは比較にならぬ報酬を受け取るようになり、またたく間に『猫の蚤とり屋』は表看板、裏看板の『密夫屋』が本業となつてしまつたのである。

やがて、男を客にとる『移動陰間的蚤とり屋』も出現し、裏表両方の需要に応じ得る器用な野郎が、一番の稼ぎ手となつた。

当時の江戸市民にとって『蚤とり屋』は、いわゆる公然の秘密で、看板に隠れた正体の具体的知識を誰もが持っていた。すなわち、「あそこの家で『猫の蚤とり』を呼んだ」と聞けば、「へえ。あの妾、またかえ？ 淫乱な女だねえ！」とか、「旦那も相変わらず達者なもんだ！ 奉公人の尻は、おおかた掘り飽きたんだろう」とか、即座に反応したのである。

町奉行所は、決して『猫の蚤とり』を黙って放って置くつもりではなかった。幾度か取り締まりに手を付けたのだが、その都度、「女の売色を許して、男の売色を許さぬとは片手落ちと申すもの。置屋が密集して火事の心配でもあるならともかく、堂々と売り声をあげ、町中を流して歩くとは見上げたものじゃ。物持ちの馬鹿娘を誑して婿養子に入り込む男なんぞより、よほど潔いではないか。何事によらず、ものの売り買いは歴乎とした商売じゃ。買う者がおるから売る者が成り立つ。その分だけ金銭が動いて江戸が繁栄するぞ。男に女を買う楽しみがあれば、女にも男を買う楽しみを与えねばならぬ。捨て置け！」と、老中首座田沼意次の指図があつたとかで、目のところは黙認の恰好になつてゐるのだ。

## 二

天明二年の春さき。

越後長岡藩の江戸屋敷で勘定方書き役を勤める小林寛之進は、あれよあれよと言う間に『猫の蚤とり』になつてしまつた。

当時、禄を離れた武士は、次の仕官先を求めて運良く成功することなど滅多になく、いずれも尾羽打ち枯らして貧乏暮らしに喘いでいた。彼等には一応の学問があり、心身の鍛練もしていたから、やらせればかなりの仕事ができた筈だが、職を与える町人はなかつた。腰に差した二本の

刀が邪魔をしたのである。寛之進は、藩校始まって以来の秀才と嘲はされるほど学問はできたし、剣術の腕前も並なみ以上だったが、先年恋女房と一粒種はよりやまいを流行病にとられてより此の方、腰の物に未練は些いささかもなかった。だから、米塩の資に困って万已やむを得ず『猫の蚤とり』を志願したという訳ではない。追放を命じた主君が、「猫の蚤とりになって無様に暮らせ！」と、仰せられたからである。

もとより『猫の蚤とり』など、誇り高き武士の携わる生業しやうばいではない。殿様も、数ある賤業せんぎしやうのなかで最も唾棄だきすべき醜いものと思われたからこそ、『猫の蚤とり』になって無様に暮らせ、と仰せられたのだ。これは、主君より賜わった『罰』である。仰せの通り、『猫の蚤とり』になるほか道はない、と寛之進は考えた。

寛之進が追放されるきっかけになった事件そのものは、まことにくだらないことだった。当代の藩主牧野備前守忠精は、明和三年たった七歳で第九代目の越後長岡七万四千石の主となつて当年二十三歳。まことに伶俐な殿様で、若年ながら千代田城中では諸侯の信頼厚く、近々幕閣入りとの噂さえある名君だった。その主君より勘気を蒙り、一瞬のうちに追放を命ぜられてしまったのである。

備前守忠精は幼時より文芸を好み、国許ではもちろん、江戸在府中も、ときどき家中一統に自作の和歌、発句、狂歌、笑い咄ばなしなどを披露したが、そのとき参集の家臣達には、かなりの御馳走が振舞われる。

その夜は『御作拝聴』の家臣がいつもより多くて、備前守は大層な御機嫌、「今宵は料理の品数を奢れ」と用人に言い付けた。

寛之進は、組頭と並んで広間のほぼ中央に座っていた。いつも無礼講が仕来で席順は各自思い

のまま、なぜか重役ほど隅に座った。御作披露につづく《御酒下され》ばかりを楽しみに、鑑賞など上の空で欠伸を噛み殺す家臣もいたが、備前守の作品は概ね分かり易くて面白いから、うっかり居眠りする者などなく、その夜も、なごやかに更けて行つた。

寛之進は、殿様の歌が好きだった。殊に、信濃川や新湊湊を詠んだ歌が秀逸だと思った。家禽類の生態を活写したものも、毎度ほほえましくて好かった。

いよいよ、お手許の短冊も残り僅かとなり、厨より慌ただしさが伝わってくる。旨そうな匂いが流れてきた。上の空組も、このときはかりは耳を敏て主君の声を待ち受ける。

備前守は、『江戸の乞食が詠える』と歌題を告げたのち、自信満々の様子で、《のみしらみ 音をたてて鳴く虫ならば わが懐は 武蔵野の原》と朗詠した。

一瞬ざわめきが起こり、やがて異様な沈黙が広間を押し包んだ。

それは当然だった。長岡藩士なら、いかに心得のない者でも良寛の歌ぐらい知っている。なかでも、《のみしらみ……》の歌が俗に受けて最も有名だった。城下の商人や在郷の百姓だって、この歌を知らぬ者はいない。

主君が音吐朗々と詠む歌には一首ごとに拍手を贈る習わしであつたが、さすがに手を叩く者はいなかった。沈黙がつづいた。

怪訝な面持ちの備前守は、一同を見回して、

「みななもの！ なんとした？ おもしろくないか」と喝采の催促をした。

そのとき、上段の間の忠精と背の高い寛之進の視線が、ぴたりと合ってしまったのである。主君の目は、「何か申せ」と言っている。寛之進の口が、ひとりでに動いた。

「恐れながら……。ただいまの歌は良寛和尚の作にござります」

「なにイ？ 良寛の歌？ だまれ！ 良寛の歌に同じものがあると申すか！」

「はっ」

「しかと左様か」

「はっ」

寛之進は、わりに平静だった。

「なれば、そのほう、たったいま大声で唱えてみよ」

忠精は、短冊を握り締めてぶるぶる震えた。

寛之進は、忠精が意識して盗作したとは露ほども思わなかった。だが、歌は一字一句良寛の作品そっくりだったのだ。偶然に同作ができたのだろうか。殿様が、あれほど著名な歌を御存じないとは、何としても考えられなかった。（これは困った）と思つたけれど、もはや良寛の歌を朗詠するよりほかに仕様がなない。おもむろに立ち上がり、「申し上げます。良寛の歌は、へのみしらみ ねをたててなくむしならば わがふところは むさしののほら でござります。御無礼つかまつりました」と歌の部分は節をつけて唱えた。

「待て！ 座るな！」

忠精が疳<sup>かん</sup>高い声で喚<sup>かえ</sup>いた。

「下の句に『むさしののほら』とあるが、我が越後の国に『むさしの』というところがあるか！

返答せい！」

「おそらく、ないと存じます。……いまだ聞いたことがござりませぬ」

「なれば、良寛は何故<sup>なんぐ</sup>『むさしののほら』と詠んだのか！」

「さあ、それは……？」

仁王立ちの忠精は、わななく腕を伸ばして寛之進を指差した。

「そのほう、いかなる遺恨あつて余の歌を良寛の作なんぞと極つけるのじゃ？ さながら合戦場で己れが挙げた首級を拾い首と誇られたも同然の恥辱」

「左様なつもりは毫も……」

四十六歳の寛之進が、ぼそぼそ釈明し始めると、二十三歳の藩主は、いやがうえにも激昂した。

「だまれ、だまれ、だまれ！ いまさら言い訳など聞きとらない！ 目障りじゃ！ 退れ！ 永

の暇をくれてやる！ 明朝より猫の蚤とりになつて無様に暮らせ！」

周囲の同輩に両腕をとられて裏門から往来へ放り出され、それっきりであつた。

足袋裸足で愛宕下の夜道をとぼと歩いていると、寛之進の刀を携えた組頭が、あたふた追つて来て、「貴様は何という莫迦な奴だ！」と罵るなり、「お長屋にある貴様の家財は無論、国許の屋敷もお召し上げた。これだけは特に許すと仰せられた。有難く受け取れ！」と道端へ放り出して一目散に藩邸へ駆け戻つて行つた。

武士は誰でも、不時の用意のため衿に二分金の一粒ぐらいは縫い込んでゐる。その夜は生まれて初めて岡場所へ泊まつた。敵娼は、ものすごい女だつた。

やがて自分も買われる身となるのだが、およそ錢を払つて《商売男》を買う程の女なら、まず佳人はおるまい、浅ましい男日照りの醜女に接して、亡き妻の美しさを日々あらためて思い知れば仏の供養にもなるだろう、と妙な理屈をつけ、いっそのこと御手討ちにしてくださいとすれば、今頃

『あの世』とやらで再会を喜び合つておられるのに、『猫の蚤とり』になつて無様に暮らせとは、殿様もまた酷いことを仰せ出されたものだ、と独り苦笑した。

翌日、訝る女から『猫の蚤とり』を取り仕切る親方の存在を訊き出し、ほうほう訪ね歩いて、

ようやく、それらしき一軒を探し当てた。

三

「えっ！ 旦那が蚤とり屋に……？」

なりたての浪人だから、まだ尾羽打ち枯らした姿にはなっていない。《御酒下され》の宴席用一張羅を着込んでいたし、腰のものも他所行き専用で、見てくれだけは立派な梨地拵えを二本差している。不精ひげは、かえって曰くありげに品良く見せたらしい。

「ほんとに旦那がおやりになるんですかい？ いってえぜんでえ、どうしなすった？」

「ちと訳あつてな……。恩に着るゆえ是非とも頼む。それもたつた今からやりたいのだ。頼む！ この通りだ」

生まれて初めて町人に頭を下げた。

矯めつ眇めつしていた親方は、寛之進が深々と頭を下げたのを見て膝を叩いた。

「読めた！ 訳てえのは、これでしよう？」

何を思ったのか、しきりに鉢巻を締める手付きをする。

「察するところ、旦那は敵討ちですね？ そうでがしろう？ 『猫の蚤とり』に姿を糞して、親の敵……、だか兄上の敵だか、それは、まだ聞いてねえから知りませんけど、とにかく、敵を付け狙おうてえ寸法だ。こいつはいいや。ねえ。図星でがしろう？」

寛之進は苦笑した。（この男、ちと芝居の観過ぎだな）と可笑しかった。《関が原》よりすでに百八十余年。本物の敵討ちなど滅多にあるものか。もつとも、近頃は神社の境内などで写真に徹した敵討ちを『乞食芝居』が演っているそうだが、あるいは、この男など本物だと思って百文の

合力に応じておるのかも知れぬ。はなしによれば、実際に軽く刀傷をつけて血を出したり、返り討ち寸前の形勢になったり、かなり迫真の芝居をするそうだから……。親方は、寛之進の苦笑を肯定と受け取った。

「ようがす。お引き受けいたしやしよう！」

一人合点で呑み込んだ親方は、下女に命じて髪結い職人を呼びにやらせるやら、女房に衣裳を出させて山と積ませるやら、大忙しで寛之進に仕度をさせた。鬻を町人風の、それもとびきり気障な恰好に結い直させた。

「旦那！ ひげは毎朝剃ってくださいえよ。不精ひげ生やした『蚤とり』なんぞ、敵の野郎に忽ち勘付かれちまいますぜ。衣裳は一番上等なのをお貸し致しましょう。なあに、損料なんぞ、めでたく本懐をお遂げになってからでよござんす」

「いや。それも行かぬて。稼ぎのうちより割で払うものと聞いてきた。ちゃんと取ってくれ。その日の商いがいくつあったかは、禪を解かせて親方が検分すれば一目瞭然。決して偽ることなど出来ぬそうな……」

「へっへっへ。一目瞭然てえ訳にやあめえりやせん。……ほんとに目付きや物言い、この野郎は水揚げを正直に出しやがったかどうか見分けるんですがね、それを言っちゃまって万度誤魔化されちゃあ堪らねえから、そういうことにあるんですよ。あれをいくら睨み付けたところで、いくつやって来たか分かるもんですかい。まあ、あそこの臭いを嗅げば、お茶を挽いたかどうかぐれえの見当はつきやすがね、それも、客先で風呂でもよばれて来やがった日にゃあお手上げです」

寛之進は、「茶を挽く」という言葉が分からなかったので、説明して貰った。



「なるほど。しかし、疲れきった様子を見れば、茶を挽いたなぞと偽りを申しても忽ち露顯いたすであらうが……？」

「ところがどうして。若え蚤とり野郎なんぞ、日に七つも商つて来た揚句に、『こんどは、おれっちが買いに行くまいか』なんぞと言いやがつて、吉原へ繰り込みやすからねえ」

「ふーむ」寛之進は些か氣後れを感じた。

「日に七つものう……。ところで、<sup>まぐわい</sup>溝合の手間賃は決まつておるのか」

「まぐわいって何のこつてす？」

「まぐわいとは、それ、男と女子が<sup>おなご</sup>な、をいたすことじゃよ」

「へえっ！ あつしとしたことが……。こんなしょうべえしていて、ちいとも知りやせんでしたわい。あれのことがまぐわいとは、やつぱり、お侍の言葉は品が良くつていいねえ」

「なんの。品の良いことがあるものか」

寛之進は、妻子を失つて以来はじめて大笑いした。

「いちいち客と談合して、その都度賃錢を決めるのか。拙者は生来話し下手べたでのう……」

「なあに、だいたいの相場がありますから、黙つていたつて、ちやあんと客が包んでくれまさあ。なかにや値切る客もいますけどね。……だけど旦那、まぐわい賃のことなんざ氣になさつてるところをみるてえと……。しょうべえのほうも、ほんとにやりなさるつもりですかい？ あつしは又、風体の真似だけするのかと思つたが……？」

「真似だけでは甲斐がない。ただし、客が呼んでくれればの話じゃがのう……」

「こりやおどろいた。へえー！ やつぱりそこまでやらにやあ、敵討ちはできませんかねえ？ 大層な御苦労なんだなあ！」